

—探求・川にちなんだ万葉集の歌—

万葉の川心 第10回

信濃國の歌

船田 園子

信濃なる 筑摩の川の細石も

君し踏みてば 玉と拾はむ

(巻第一四 三四〇〇)

病床の父を見舞った。

脳を冒されたその人は、ただ空をみつめていた。

近づくと、「おお」と言っただけ、また空をみる。

ベッドの脇の、小さな椅子に腰掛けて、かける言葉を探した。

「父さん」

それだけ言っただけ、空をみつめたままの父の手をとった。

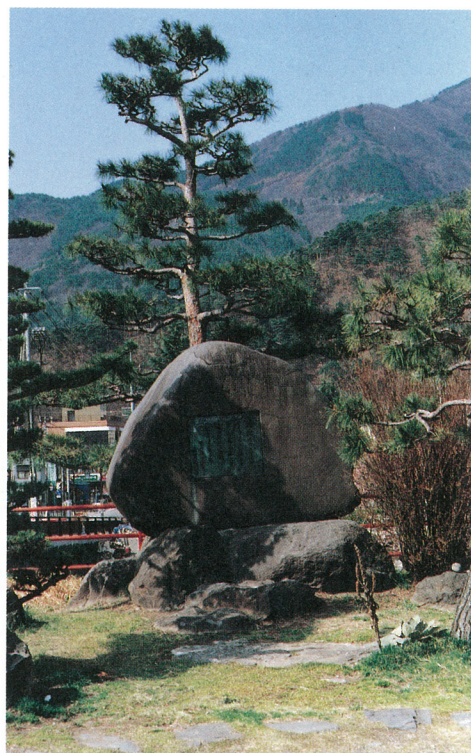
言葉はみつからなかった。

何も言わなくてもよかった。

心が、つながった手から伝わる気がしていた。

大切にしているものを思い起こすと、それは決して高価なものとは限らない。むしろ、人から見たら「なぜ」と聞かれるような、ささやかな物であったりする。古い人形。一枚の写真。そして、ひとつの小さな石。ただの物にすぎないのに、人が触れると、そこに魂が宿るといわれている。それは決して大昔だけのことではない。

「信濃の山々。そこを流れる千曲川の、小さな石でさえも、好きなあの方のお踏みになったのなら、美しい玉だね、玉と思っただけでいいでしょう。」ただ一途にあの方が好きという気持ちで、石を玉に変えてしまおう。その方がふれたもの、その方が通った小道、着ていた衣、残香さえ、すべてに、その人を想い、魂を感じる。



あの方が帰られた後、そぞろに歩いてきたこの河原。

小石をひとつ拾い上げて、いとおいそうに抱く乙女の姿が、その心とともに浮かんでくる。それをつつむ信濃の山も、清らかな千曲川の流れも、乙女の心を温かく見守っている。

千曲川は、甲武信ヶ岳を源として、信州の佐久、小諸、上田、更埴の自然を巡る。この歌の歌碑は、更級郡上山田町の万葉橋際の公園の中にある。長野市で犀川と合流、新潟県に入って信濃川と名を変える。

当時は「ちぐま」と呼んでいたようである。この歌は東歌の中の一首で、東国の民謡である。東歌は、地名が多くでてきたり、地方の言葉そのままに歌われていて、都の歌人が詠む歌とはまた別の、飾りのない、いきいきとした人々の心であふれている。

万葉集は、日本で一番古い歌集である。それでいて、現代を生きる私たちの心にとても近い。ほんとうに素晴らしい歌は時を越え、かえがたい財産となる。物に命をみれるのは、人間だけである。そう思うと、人はたくましく、そう思う程に、人はいとしい。

形見となった父のジャケットを羽織ると、父が心に満ちてくる。